

共立女子大学・短期大学図書館所蔵和装本の教育利用

岡田 ひろみ 飯田 さやか 近藤 壮 咲本 英恵 土田 牧子 堀 新

I はじめに

近年、古典教育のあり方についての議論が、様々な学会において活発に行なわれている。周知の通り、古典文学を不要のものとする社会的風潮は年々強くなっており、古典文学教育に関わる者としても、研究者としても看過しがたい状況にある^(注1)。

古典文学への興味・関心を向ける方法のひとつとして、「古典籍」と呼ばれる主に江戸時代以前の和本の紹介および、本に関する啓蒙が重要だと考えている。本学図書館には、幸いなことにある程度まとまった数の古典籍が所蔵されているが、1996年に作成された『和装本目録—第一—』に掲載されていない本については情報を得るのが難しい状況にあった。以前、「共立女子大学・短期大学図書館所蔵和装本目録作成のために」（『総合文化研究所紀要』2021年）で目録を作成し、『第一』未掲載リストの作成、簡易な書誌情報記載、料紙研究をおこなった^(注2)。

引き続き、2022年度総合文化研究所共同研究助成を得て、『和装本目録—第二—』を作成した。『第一』未掲載古典籍の中でも、稀本・善本もしくは広く流布し多くの人々に読まれた本を約40点選び、書誌事項のみならず、作品内容についても解説を記した。そもそも、『目録—第二—』は整理・研究はもとより、授業利用も視野にいれて作成しており、早速、2023年度「日本文学講読A」（文芸学部専門分野Ⅱ）科目履修者に配布し、授業利用している。

本稿では、本学図書館所蔵和装本の教育利用をどのようにしてゆけばよいか、Ⅱにおいて『目録—第二—』解説文をあげ、Ⅲで「日本文学講読A」における目録及び、本学図書館所蔵古典籍の活用について考察する。

Ⅱ 『和装本目録—第二—』 紹介古典籍解説

目録より、解説文を抜粋し、それぞれの年代も追記した上で掲出する^(注3)。

《総記》

1 江戸大節用海内蔵（えどだいせつようかいだいぐら）（江戸時代末期）

刊本。乾坤二冊。縦26cm×横18.5cm。黄檗色蝶型押紋様表紙。五つ目袋綴。外題は刷り題箋（第一冊「改訂増補江戸大節用海内蔵乾」、第二冊「改訂増補江戸大節用海内蔵坤」）。宝永元（1704）年原版。天保四（1833）年増補。文久三（1863）年八月序・刊。高井蘭山編。中村経年補輯。菊川英山画。広く流布し、江都「須原屋茂兵衛」他、京都「出雲寺文治郎」他、大阪「河内屋喜兵衛」他、尾陽「永楽屋東四郎」他など、全国各地、多数の書店で刊行されたことがわかる。

「節用集」はもともと、室町期に成立した古辞書だが、江戸時代に多様に展開し、極めて多くの「節用集」が出版された。刊行が確認された版種だけでも四百本以上になり、内容も多岐にわたる（佐藤貴裕『節用集と近世出版』和泉書院 2017年。『節用集大系』全100巻 大空社）。この時代の特徴として、辞書の通俗化があるが、本書も百科事典的に作成された近世末期を代表する「節用集」といえる。本書の構成は、乾坤二冊だが、乾は全て付録事項であり、地図や、名所旧跡、名所案内、人物略伝などを掲載する。地図には「万国全図」も掲載され、この時代の一般の人々が「世界」を意識できたこともうかがえる（本書が刊行された文久三年は薩英戦争が起きた年）。坤は、旧来の「節用集」本文を掲載しており、より検索しやすいようにイロハ各部を更に二十三門に分類している。

（請求記号W031／53／1／2）

2 根元諸物記（こんげんしょぶつぎ）（江戸時代中期）

写本。一冊。縦19.2cm×横14.8cm。表紙は香色。四つ目袋綴。外題は書き題箋。奥書に「已上百二ヶ條畢 伊藤甚右衛門幸氏／正徳四甲午歳 瀬山傳大夫 重熙／寛延二巳巳歳五月廿二 楠田土立 長高／安永九庚子孟春」とある。これによれば、本書は正徳四甲（1714）年に伊藤甚右衛門幸氏によって書写ないし著作されたものである。なお、東北大学附属図書館 狩野文庫マイクロ（狩10-24369-1）「推諫家／根元諸物記」（詩巻）の奥書には「上 八十六箇条畢 伊藤甚右衛門 幸氏／称徳三癸巳中秋昏 秋昏」とあるが、それによれば、伊藤甚右衛門が『根元諸物記』の編著に関わっていると見えなくもない。

伊藤甚右衛門幸氏は江戸時代の故実礼法家・水鳥卜也の流れをひく人物。書写者瀬山重熙は未詳、ただし、重熙のあとに本書を書写している楠田長高は、本学所蔵『香道』（W792／2）の書写者でもある。詳しくは『香道』欄を参照されたいが、『香道』は瀬山傳大夫重甫のあとに楠田長高が書写しており、その重甫と、本書の書写者・重熙は関係者ないし同一人物と考えられる。そうだとすれば、本書は「香道」の三十年前に、同じ書写者たちによって書写されていたことになり、故実書の伝流、あるいはサロン（学習集団）の所在があらわれているようで興味深い。なお本書は、院号の起源に始まり、座列の並び方の起源で終わる。さまざまなものごとの起源を示した書である。

（請求記号W210／395）

3 増補頭書訓蒙図彙大成（ぞうほかしらがき きんもうずいたいせい）（江戸時代後期）

刊本。全十冊。縦22.3cm×横15.7cm。紺色七宝花型押表紙。四つ目袋綴。外題は刷り題箋。山岸文庫、横井最澄の蔵書印有り（山岸文庫は山岸徳平蔵書、横井最澄は不明）。寛政元（1789）三月刊。「富小路通三条上ル町 弘簡堂 須原勘兵衛」。

本書は、江戸時代の儒学者中村惕斎が、寛文六年に編纂した『訓蒙図彙』二十巻十四冊をもととしている。いわゆる百科事典で、絵を豊富に用いて作られており、一般向けの書物として、江戸時代中期以降も増補されながら何度も刊行された。下河辺拾水画。光力丸・謙斎序。江戸時代に広く流布し、現在『江戸時代女性文庫』（大空社）や『訓蒙図彙集成』（大空社）によって、様々な版を

比較することができる。本書も珍しいものではないが、一冊目から十冊目までを通して、朱や墨の書き入れがあり、購入者の学びの軌跡がうかがえる。

(請求記号W031/85/ 1～10)

《神道》

4 千歳昔物語（せんざいむかしものがたり）（明治時代）

刊本。一冊。縦22.3cm×横15.6cm。表紙は緑色無地。四つ目袋綴じ。外題は刷り題箋「千歳昔物語全」^{せんざいむかしもの}。題箋上部に日月の図。序文末尾に「宝暦四戌春 洛下因幡堂之辺 八十才之老人書」。本文末尾に「京書林、寺町松原下ル、菊屋喜兵衛板」。落款印が墨で消されている。

序文に続いて巻頭挿絵が二点あり。詞書はそれぞれ「天てらす神の恵みはつきしなく四方に生出る松の葉の」、「此国は神のはしめて神の子てかみのものにて神事をする」。本文内容は、日本を神の国と見る国学思想に基づいたものになっている。管見の限り、同名の書物は他に所蔵がなく、不明な点の多い書物である。

(請求記号W159/ 54)

5 天説辨辨（てんせつべんべん）（江戸時代末期）

写本。上下二冊。縦26.5cm×横18.9cm。表紙は浅縹色布目無地。五つ目袋綴。外題は書き題箋（第一冊「天説辨辨 上」、第二冊「天説辨辨 下」）。内題は「天説辨々」。跋文によれば「文化十四年正月七日」に成った。巨郭の刷られた紙に書写され、下巻の末には「伊吹能舎先生著撰書目」が付く。また角包があることから、内輪で使用するのではなく、注文を受けて写されたものと想定される。

本書は、江戸末期の国学者、平田篤胤によって著された。内容は、同じく国学者であった植松茂岳の『天説弁』に対する反論である。そもそも『天説弁』は、本居宣長の『古事記伝』、服部中庸の『三大考』、平田篤胤の『靈能真柱』を批判したものである。

それぞれの作品の関係を記しておく、まず本居宣長『古事記伝』に、門人の服部中庸の『三大考』が付録として載せられて刊行された。この本では、記紀神話への考察をもとに、世界の成り立ちについて論じている。この考えを踏まえて記されたのが平田篤胤の『靈能真柱』である。篤胤は、世界は三柱の神が空を漂っているところに、世界の種が作られたことに始まるとする。そして人は死後、黄泉の国ではなく大国主命の司る幽冥に行くことと主張する。この主張に異を唱えたのが、植松茂岳の『天説弁』であり、そのさらなる反論として著されたのが本書である。この論争は、さらに植松が『天説弁々之弁』を著すに至り、結果的に篤胤は名古屋藩仕官を遂げることが出来なかったという。

(請求記号W171/ 18/ 1～2)

《言語》

6 名所便覧（めいしょべんらん）（江戸時代中期）

写本。天地人三冊。縦27cm×横20cm。胡桃色刷毛目表紙。五つ目袋綴。外題は書き題箋（第一冊「名所便覧 天」、第二冊「名所便覧 地」、第三冊「名所便覧 人」）。内題は「名所便覧」。蔵書印「阿波国文庫」（全冊）。跋文なし。

『名所便覧』は歌学書。江戸時代中期の歌人、小沢蘆庵による。小沢は京都を中心に活躍し、『古今和歌集』を尊重する歌風で知られ、当時の平安和歌四天王の一人であった。

本書は、和歌に詠まれる名所を配列し、それぞれ所在と参考歌を記す。本書は「いろは」の配列であるが、「あさかやま」の系統もある。第一冊（天）に「い」から「か」、第二冊（地）に「よ」から「て」、第三冊（人）に「あ」から「す」を取める。歌の出典は二一代集のほか、私家集、『日本書紀』、『古事記』、『旧事紀』からも引く。名所の所在と和歌を主に記す簡易的な構成であるが、関連する語（縁語）も二、三語ほど示しており、和歌を鑑賞するだけでなく、詠む際にも本書が参照されたと想像される。

（請求記号W911.1/75／1～3）

7 和歌枕詞補注（わかまくらことばほちゅう）（江戸時代後期）

刊本。上下二冊。縦17.5cm×横11.8cm。表紙は浅葱色無地。四つ目袋綴。外題は刷り題箋（第一冊「和歌枕詞補注 上」、第二冊は剥落）。内題は「和歌枕詞補注」。蔵書印「ヤマ門（以下判読不能）」。刊記「安政三辰十月／東都に而求之」。河内屋源七郎版。上下ともに朱点多数。

『和歌枕詞補注』は江戸中から後期の国学者である尾崎雅嘉によって編纂された。尾崎は和書の解題書である『群書一覽』を著したことでよく知られる。本書は、百八十余りの枕詞をいろは順に配列し、それぞれ導く語や参考歌を示す。参考歌は勅撰集の他に『万葉集』や『千五百番歌合』、『夫木和歌抄』など、幅広い歌集から採られている。枕詞といっても、単に「ちはやふる→神」といった代表的なものを示すだけではなく、「賀茂の社」や「斎の宮」のような、関わる語を多く列挙している。項目によってはその語の由来を、『日本紀』や『旧事紀』、『古事記』を原拠とし、様々な説を引用している。

（請求記号W816／19／1～2）

8 倭名類聚抄（わみょうるいじゅうしょう）（江戸時代）

刊本。五冊。縦26cm×横19.3cm。胡桃色表紙（はけ目有り）。四つ目袋綴。外題は刷り題箋。「倭名類聚鈔序」「新刻倭名類聚鈔凡例」「題和名鈔」「倭名類聚鈔卷第一 源順撰」の順。刊記に「書林 大坂心齋橋筋順慶町 渋川清右衛門」とある。出版年時は不明。渋川清右衛門は、寛文七（1667）年版『和名抄』の版元であるが、本書は刷りがかなり粗く時代はかなり下るか。

『和名類聚抄』は、学者で歌人でもあった源順（嵯峨源氏）によって編まれた古辞書。醍醐天皇第四皇女勤子内親王より辞書著作の要請があり、それに応じて編纂された（承平四（934）年前後か）。漢語で名詞を意味により分類し項目に分け、万葉仮名で対応する日本語（和名）を記す類書形式の

辞書である。今の漢和辞典や百科事典の要素を含んだ辞書。略称を『和名抄』。十巻本と二十巻本があるが、その先後関係については議論のあるところである。写本も多いが、江戸時代に那波道円の元和三（1617）年古活字版を祖本とする版が流布した。本書も古活字版を祖本とする（ただし、古活字版は、「題」「凡例」「序」「巻第一」の順）。

（請求記号W813／235／1～5）

《文学》

9 秋二百六十番歌合（あきにひやくろくじゅうばんうたあわせ）（江戸時代後期）

刊本。上下二冊。縦17.6cm×横11.6cm。胡桃色布目表紙。四つ目袋綴。外題は書き題箋（「秋二百六十番歌□」*□は破れ）。弘化二（1845）年序。弘化三（1846）年刊。「弘所書林 江戸十軒店英大助 京三条通上新町 金地屋武右エ門 大阪心齋橋通水町 河内屋和助」とある。刊記の前に「ヤマ門□□」の蔵書印がある。

『秋二百六十番歌合』は加納諸平（立秋 一～五十二番）、中村良臣（萩 五十三～百四番）、西田直義（虫 百五～百五六番）、萩原廣道（月 百五七～二百八番）、村田嘉言（秋祝 二百九～二百六十番）五人の判者のもと開催された歌合。加納諸平は、地方における歌壇の普及に尽力した国学者。全国から優れた和歌を募集して類題和歌集を編纂しており、この歌合もその活動の一環と考えられる。筆頭歌人に「松下出雲守隆和」があたり、下巻末尾には撰歌された多くの人々の名前が掲載されている（隆和以下、森田越後介別名、八廉雅楽義寿、栗岡大和正春根、神宮寺舜学…後略）。判者の一人萩原廣道は『源氏物語評釈』の作者としても有名。

（請求記号W911.15／8／1・2）

10 伊勢物語絵入（いせものがたりえいり）（江戸時代中期）

刊本。上中下三冊。縦22.8cm×横16.5cm。表紙は藍。四つ目袋綴。外題は刷り題箋。中冊表紙には、金（ないし銀）で描かれた群竹とおぼしき絵がかすかに見える。下冊にも同じく山、木、小屋、鹿の絵がかすかに見える。各冊一頁目に烏江文庫、藤井文庫、川島蔵書文庫の蔵書印あり。朱入れなし。

奥書は下冊に「于時貞享式乙丑年中秋吉辰 繪師 京 吉田定吉 押小路通橋町 大文字屋万之助 西村七郎兵衛 開板」とある。絵師吉田定吉は、江戸中期の画家・浮世草子作者の吉田半兵衛（生没年未詳）のことか。吉田半兵衛の画に「好色五人女」「好色一代女」などの挿絵が、著に「好色訓蒙図彙」「好色貝合」などがある。

上冊は初段から三十八段の途中まで、中冊は三十八段の途中から七十五段の途中まで、下冊は七十五段の途中から百二十五段までを載せる。各冊、裏見返しに絵があり、上冊は書物を書いている業平とおぼしき男、中冊には文箱を持って渡殿を渡る女、下冊には山里と鹿が描かれている。ただし本文中に挿入される絵は同頁に載る章段内容とずれることもある。

『伊勢物語』は、「昔、男ありけり」の書き出しで知られる、主人公の男の和歌を中心とした短編

物語集で、作者・成立年ともに未詳。平安時代中期成立の『源氏物語』に、すでに古典として言及されている。鎌倉時代以降は和歌の手本として藤原定家などの歌人や連歌師たちの必読の書となり、さらに江戸時代には『源氏物語』とともに尊重され、多くの注釈書が出版された。

(請求記号W913・3／297／1～3)

11 伊呂波類聚和歌注(いろはるいじゅうわかちゅう)(江戸時代初期)

写本。四冊。縦28cm×横20.3cm。山鳩色地小菊模様表紙。五つ目綴。縹色の紙で補修したあとがみえる。外題は書き題箋(第一冊「伊呂波類聚和歌注一 自伊至加」「伊呂波類聚和歌注二 自与至具」「伊呂波類聚和歌注三 自屋至阿」「伊呂波類聚和歌注四終 自佐至須」。序や奥書なし。四冊それぞれ最終丁に「菊亭家」の蔵書印。「菊亭家」は、鎌倉時代末期、西園寺実兼男兼季が邸宅とした今出川に菊を愛好し植えたことからとられた名称。家に伝わる文書は京都大学、専修大学に「菊亭文庫」として所蔵されている。

本書は、万葉集をはじめ、その他勅撰和歌集掲載の和歌を伊呂波順に並べ、和歌の左に注釈を記す形式をとる歌学書である。第一冊「伊」の冒頭和歌は、万葉集所収の「いさことも早日本へ大とものみつのはま松待恋ぬらん」という『万葉集』(巻一・63)があげられ、「山上憶良入唐して日本を思ひて……」と左に注が記される。「岩見のやたかつの山の」(同・巻二・132・人麿)、「家にあれはけにもるいひを」(同・巻二・142・有馬皇子)と、以下万葉集所収の和歌と注が計十首続く。次に引用されるのは新古今集所収の和歌が、夏、秋、冬、雑中という形で部立別にあげられ注が記される。同じ書名の本は、京都大学に写本があるのみである。

(請求記号W911.1／70／1～4)

12 繪入源氏小鏡(えいりげんじこかがみ)(江戸時代)

刊本。上中下三冊。縦27cm×横19cm。表紙は藍色雷紋繫ぎ地に蓮華唐草と宝尽し。五つ目袋綴。外題は書き題箋(第一冊「繪入源氏小鏡 上」、第二冊「繪入源氏小鏡 中」、第三冊「繪入源氏小鏡 下」)。跋文「明暦三年丁酉仲秋吉辰」。明暦三年安田十兵衛刊。第一冊に「桐壺」から「明石」、第二冊に「少女」から「匂宮」、第三冊に宇治十帖と題して「橋姫」から「夢浮橋」を載せる。

『源氏小鏡』は、『源氏物語』の梗概書(ダイジェスト版)の一つ。挿絵と共にそれぞれの巻のあらすじと主な作中歌を載せ、室町初期の成立とされる。『源氏物語』の写本は公家や武家などの限られた知識層しか所持していなかったため、こうした梗概書が多く作られた。『源氏大鏡』、『源氏物語提要』と並ぶ代表的な梗概書であり、その中でも最も流布し、歌人や連歌師に重宝され、謡曲などにも引用された。

写本も多く、美しい料紙で巻物に仕立てられたものもある。近世に至って多数の刊本が刷られたため異本が多く、本文によって六つの系統に分けられる。本書の本文は第二系統(改定本)に属する。

(請求記号W913・3／300／1～3)

13 古今和歌集（こきんわかしゅう）（江戸時代）

刊本。一冊。縦27cm×横19cm。表紙は藍色。五つ目袋綴。外題は書き題箋（「古今和調集上下」）。蔵書印「上田文庫蔵書」。跋文によれば天和三（1683）年丸屋源兵衛板。

『古今和歌集』は我が国最初の勅撰和歌集である。延喜五（905）年醍醐天皇の勅命により、延喜一四（914）年頃に成立したとされる。撰者は紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑。全二〇巻から成る。巻頭に仮名序、巻末に真名序が付く。約千百首の歌を、春・夏・秋・冬・恋・離別などのテーマごとに部を立て、分類して収める。特に「やまと歌は、人の心を種として…」から書き出される仮名序は、和歌の概念を規定し、その後の歌学に多くの影響を与えた。また、七五調や縁語、掛詞といった和歌の技巧を備え、「古今調」として後世の手本となった。

本書は、江戸期に出版された版本の中では古い方に位置する。冒頭に仮名序、末尾に真名序を備える。真名序の最終文、序を記した日付が「延喜五年歳次乙丑四月十八日」とあり、仮名序と一致している。この部分は、仮名序と真名序のどちらが先に成立したかを論じる上での要点であるが、本文の系統によって異なる。本書は、『古今和歌集』の伝本のうち、最も流布した定家本ではなく、清輔本などの他の系統であると考えられる。

（請求記号W911・13／56）

14 三家類題抄（さんけりいだいしょう）（江戸時代後期）

刊本。上下巻一冊。縦18cm×横12.3cm。浅縹色布目表紙。四つ目袋綴。外題は刷り題箋（「三家類題抄 全」）。市岡猛彦序・森廣主編。裏見返しに「文政元年十一月あつめ終ぬ 森廣主」とあり、末尾の刊記には「尾張 榎園社中蔵板」の記載。匡郭有り。

『三家類題抄』は、「三家（良経・定家・家隆）」の和歌を類題ごとに撰歌した私撰集である。「春部」からはじまり、「立春 元日宴 初春 初春風 足袋宿早春 子日 霞 暁霞 野外霞 海辺霞 春江霞 江上霞 湖上霞……」とかなり細かく題を分類する。大きくは春・夏・秋・冬・恋・雑の部に分かれる。それぞれの題に対して必ずしも三人全員の和歌を引くわけではなく、題によっては一首のみのものもある。

もともと上下二冊本だが、本書は合冊した形で出版された。刊行時期は不明だが、最初は、文政五（1822）年に京都で二冊本として出版されており、文政五年以降であろう。（「三村晃功「森廣主・市岡猛彦編『三家類題抄』の成立」『光華日本文学』2006年10月」）

（請求記号W911.14／79）

15 長恨歌 琵琶行 野馬台（ちょうごんか びわこう やばだい）（江戸時代）

①W923／25／2

刊本。一冊。縦27.3cm×横17cm。表紙は香色。四つ目袋綴。奥書に「寛永廿年中秋吉辰 二条通観音町風月宗知新刊」とある。一頁目に「雲出鳥還処所蔵」の蔵書印あり。一頁八行、罫線なし。

朱入が散見される。

②W923／25／3

刊本。一冊。縦15.6cm×横17cm。表紙は朽葉色。四つ目袋綴。外題は書き題箋。奥書に「慶安戊子末春吉且 寺町誓願寺前 西村又左衛門刊之」とある。一頁八行、罫線なし。朱入なし。行送り、版心の柄がW923/25／2（寛永廿年本）とよく似る。

③W923／25／4

刊本。一冊。縦23.3cm×横18.8cm。表紙はこげ茶色。四つ目袋綴。題箋なし。一頁目に「雲出鳥還処所蔵」の蔵書印あり。一頁七行、罫線あり。注見出し白抜き。刊記なし。奥書に「ヤナキヒメダ 浅海華枝 モノナリ／燈花邊ニテ申之／アメフレハキセキヲコユルミツワケテヤスクラリタチモロヒトウエシムラナヘソノイネヨマホニサエヌ」とある。このカタカナ歌は『本居宣長全集』第十五卷（筑摩書房、1969年）に「雨降れば 堰関を越ゆる 水分けて 安く諸人 降り立ち 植ゑし群苗 その稲よ まほに栄えぬ」のことか。

『長恨歌』は中国唐代の詩人・白居易による漢詩（長歌）。『長恨歌』の前には白居易の友人・陳鴻による『長恨歌』の散文版『長恨歌傳』がつく。八世紀半ばの、唐の玄宗皇帝と楊貴妃の悲劇をもとにしている。『琵琶行』は序文によれば元和十五（820）年に作られたとあるが、辞書では一般に、815年ないし816年の成立とされる。タイトルの「行」はもともとは「引」の字で、「曲」という意味である。この詩が作られた当時、白居易は無実の罪によって江州という地に左遷されていた。ある秋の夜、客を港まで送ると、港に並ぶ舟の中から、かつて都で聞いたことのある琵琶の音と歌声が聞こえてきた。白居易は、いまやすっかり老い衰えて落魄の身となり江州をさまよっているというその女性の声と琵琶の音に感動し、この詩を作ったという。

『長恨歌』『琵琶行』は平安時代にわが国に伝わり、『源氏物語』以降、俳壇に至るまで文学に大きな影響を及ぼした。江戸時代には、本書のように、当時白居易撰（または六世紀初、宝誌和尚作）と考えられていた『野馬台詩』（日本の滅亡を予言する詩）と併せる形で刊行されることが多い。

（請求記号W923／25／2～4）

《芸能》

16 男立出入湊（おとこだてでいりのみなと）（明治時代）

刊本。一冊。縦21.4cm×横15.4cm。表紙は浅葱色無地。四つ目袋綴。題箋なし。表紙に手書きで「男立出入湊」と書かれ、奥書、刊記なし。歌舞伎の六場面が見開きで描かれ、役名と簡単な説明を添える。版心に「男」、丁数は三から八までが記される。いわゆる絵^{えづくし}尽と呼ばれる類の出版物の一部かと考えられるが、後述のとおり不明な点が多い。

『男立出入湊』の上演記録は、管見の限りでは明治七（1874）年一月に大阪の松島三河座、明治三二年六月に大阪朝日座に見ることができる。それ以前に『男伊達出入の湊』の外題で嘉永期（1848～1854）に名古屋でも上演の記録がある。資料が乏しいが、これらの上演はそれぞれに少しずつ異動があり、かつ、いずれかの上演が当該資料と対応しているのかを知る手がかりはない。また、

幕末から明治にかけての他の絵巻と比較すると、当該資料は少し印象が異なることも否めない。

絵巻は上方を中心に出版されたが、安永から文化にかけての時期（1772～1818）に「絵巻集」としてそれ以前の上巻の絵巻を再版し、合綴して売ることが行われたという。一部の読者はそれをばらばらにして作品ごと、数作品ごとに綴じたため、出版年代の特定が難しい。読者によって綴じ直されたものは、絵巻集販売時の単色の包み紙で綴じられている場合が多いとのことで、当該資料（表紙は浅葱色の無地・手書きの外題・丁数が三から始まる）もこれに相当する可能性はあろう。安永以前の上巻作品である可能性の一例として、享保七年二月の大阪角の芝居における『男一疋出入湊』を挙げておきたい（「男」と「出入湊」を含む外題は他にない）。

物語については、当該資料のみから追うことはできないが、享保期上方の侠客として知られる根津四郎右衛門、また彼をモデルとした架空の人物である黒船忠右衛門、元禄期の無頼漢として名高い雁金文七などが登場する。また雁金文七と共に雁金五人男と呼ばれた布袋市右衛門、極印千右衛門、あんの平右衛門、かみなり庄九郎らの名も見ることができる。いずれもかつて歌舞伎や浄瑠璃で、とりわけ上方では知られたキャラクターたちで、いわゆる黒船ものや雁金文七ものと呼ばれる作品群に含まれるものだろう。当該資料からは、彼らが繰り広げる喧嘩や力自慢の様子が眼目の芝居だったことが窺われる。

（請求記号W721／113）

17 声色早合点（こわいろはやがてん）（江戸時代後期）

刊本。一巻一冊。縦18cm×横12.6cm。表紙は藍色地に扇面柄。扇には白地に赤で役者の家紋が描かれる。四つ目袋綴。外題は刷り題箋「三芝居／役者 声色早合点 初編 全」。序文末尾に「天保二年辛卯年 正月吉日 五柳亭徳升戯述」。跋文なし。

『声色早合点』は、天保二（1831）年刊の役者の声色芸（口真似芸）の指南書である。作者の五柳亭徳升（1793～1853）は江戸後期の戯作者で、合巻や滑稽本を著したことで知られる。全三巻（初編・二編・三編）から成り、当該資料はその初編。

序文に続く巻頭挿絵「当時高名の素人声色つかひの連」（二ウ三オ）「其二」（三ウ四オ）には、当時よく知られた声色師たちがそれぞれ得意とする役者の似顔で描かれる。四オから本文となり、各丁の表に人気役者の似顔、頭注にその役者のセリフの癖（声色芸のポイント）が示され、裏にその役者が得意とするセリフが続く。

江戸時代には、歌舞伎役者のセリフを真似る声色芸が早くから発達した。名セリフを集めた『鸚鵡石』や『せりふづくし』といった書物が出版され、歌舞伎ファンたちがこぞって役者のセリフを模倣した様子が窺われる。当該資料もそれに類する書物である。

（請求記号W774／270）

18 其粉色陶器交易（そのいろどりとうきのこうえき）（明治時代）

刊本。三巻三冊。縦22cm×横15.4cm。四つ目袋綴。表紙は青鼠色地に藍色の役者家紋。外題は刷

り題箋「西国立志編・卷之式 そのいろとりとうきのこふあき 其粉色陶器交易 上」。刊記は「明治五年 壬申十一月御免許／佐橋富三郎綴／白水廣信画」。三巻三冊の絵入根本である。絵入根本とは歌舞伎の台本（台帳）を刊本として売り出したもので、上方の上演資料として重要な位置づけを占める。江戸には広まらなかった出版ジャンルである。天明期（1781～1789）から出版が始まり、文化期（1804～1818）から天保期（1830～1844）に最盛期を迎えた。本作『其粉色陶器交易』が絵入根本の最後の出版とされる。本文（ト書き、セリフ、浄瑠璃詞章）に計六点の挿絵を含むほか、上巻冒頭に彩色の舞台面の図が二点収められるなど、絵入根本の特徴を備えている。絵師は白水廣信。当該資料では舞台面の彩色図に続いて、朱子学の教訓「精神一到何事不成」の書が四丁ウから五丁ウにかけて掲げられている。

『其粉色陶器交易』は佐橋富三郎作の作品で、明治五（1872）年十一月京都北側大芝居で上演された。東京に先駆けた初の散切物（散切頭の人物が登場するなど、開化期の世の中を描いた歌舞伎）として知られる。また本作は、サミュエル・スマイルズ著『セルフ・ヘルプ』を中村正直が訳した「西国立志編」を元にした翻訳劇でもある。物語は、フランスの陶工、パリッシー巴律西が妻子を犠牲にして西洋陶器の製作に明け暮れ、最終的に名品を生み出してパリへ向けて出立するという言わば単純なもの。しかし貧苦に悩む妻子の愁嘆など従来の歌舞伎の枠組みを用いながら、立身出世を描く物語であるところに、本作に続く散切物のひとつの特徴を見ることができる。出演は市川右団次、片岡我童ほか。

（請求記号W912.6／65／1～3）

《歴史》

19 吾妻鏡脱漏（あづまかがみだつろう）（江戸時代後期）

刊本。一冊。縦26.8cm×横19.1cm。表紙は香色。五つ目袋綴じ。横外題は刷り題箋に「東鑑脱漏 全」とある。この典籍の販売時に付けられていた袋が付属しており、「吾妻鏡脱漏 以寛文印本摺之」と摺られている。奥書には「此書拋寛文中之印本、以施諸活版／弘化四年丁未孟夏」とある。寛文八（1668）年版を弘化四（1847）年に再板したものであることがわかる。

鎌倉幕府の正史として著名な『吾妻鏡（東鑑）』は、源頼政が挙兵した治承四（1180）年から前將軍宗尊親王が京都に送還された文永三（1266）年までを編年体に記した史書である。原本は存在せず、小田原北条氏、黒田如水を経て、黒田長政が江戸幕府に献上した。これを北条本といい、四二、三冊あったという。この北条本に徳川家康が収集と復元して慶長十（1605）年に五一巻を木製活字で刊行した。これを伏見版という。近年の研究では、北条本の献上以前から徳川家康は五一巻中の大半を収集していたとされる。

毛利家や島津家も吾妻鏡を収集しており、島津本によって伏見版の脱漏部分が補われた。これが本史料で、嘉禄元（1225）年～安貞元（1227）年の記事がある。このなかには嘉禄元年七月一日の北条政子の死亡記事などがある。

（請求記号W210.4/50）

20 寛永日記（かんえいにつき）（江戸時代）

写本。一冊。縦27.6cm×横19.6cm。表紙は藍色。五つ目袋綴。横外題は題箋に「寛永日記 全」とある。蔵書印は「田辺小納戸蔵」。なお「岡田芳蔵蔵書」と記された貼り札が本史料に挟まれているが、本来どの場所に貼られていたかは不明。

寛永元（1624）年～同二〇（1643）年における江戸幕府の出来事を記したものの。同名異書はあるが、それらとの関係は不明である。以下に構成を示す。

卷一 寛永元年～同三年

卷二 同四年～同九年

卷三 同一〇年

卷四 同一一年

卷五 同一二年～一四年

卷六 同一五年

卷七 同一六年～同一八年

卷八 同一九年～同二〇年

これらのうちの一部を記すと、寛永一一年の三代将軍家光の上洛、同一四～一五年の島原・天草一揆（いわゆる島原の乱）、同一七年には前年に来航を禁じたポルトガル船が長崎に漂着（実際は貿易再開を求めて来航）し、キリシタンであること等の理由によって乗組員三〇人余（実際は六一人）を処刑したこと等が記されている。

（請求記号W210.5/88）

21 元正間記（げんしょうかんぎ）（江戸時代）

写本。一四冊。縦24.1cm×横16cm。表紙は藍色。四つ目袋綴。外題はなく、代わりに「元正間記 壺」のように墨書されている。なお第一冊の見返しに「口上／右読十四卷、何方江紛参候共、／此名元次第被相返候様被下度、如此／書伝置申候、以上、／本田氏与惣治／文化十年酉ノ陽月吉朔日」との書き込みがある。これにより、文化一〇（1813）年段階での本史料の所蔵者が本多与惣治と判明する。このような書き込みは貸本屋の蔵書にしばしば見られるので、本多は貸本屋と思われる。

内容は、「序 天下泰平武家繁昌之事」に続いて五代将軍綱吉の御代始めとして延宝九＝天和元（1681）年の越後騒動から元禄一五（1702）年の忠臣蔵・赤穂事件までの出来事を記す。タイトルは元禄～正徳年間の記録を意味していると思われるが、実際の収録記事はその期間には収まらない。また同名史料が多くあり、記述の一部が共通するものも少なくないが、本史料との関係は不明である。

（請求記号W210.5/65/ 1～14）

22 古事記伝追継考付録（こじきでんおいつぎこうふろく）（明治時代）

刊本。一冊。縦26.5cm×横18.5cm。縹色布目表紙。五つ目綴。外題は刷り題箋（「古事記傳追継考

附録 全〕。跋文の前に「明治十五年十二月十一日御届 愛知県士族 茜部輿理刀」、刊記に「発行所 尾張国名古屋本町通八町目 永楽屋東四郎」とある。

『古事記伝追継考附録』の著者は茜部相嘉（あかねべすけよし）。幕末の尾張藩士、国学者として多くの著作があり、本書巻末にも著作目録を掲載する。『古事記伝追継考附録』は、「建御名方富命彦神別神社考」という見出しで、本居宣長の『古事記伝』を引用しながら、自説を追記する形で記した注釈である。

本書は茜部相嘉の子孫である茜部資躬氏から本学に寄贈された図書で、その経緯を記した手紙には山岸徳平による茜部相嘉に関する説明も記載されている。

(請求記号W210/94)

23 伊達忠臣実録（だてちゅうしんじつろく）（江戸時代）

写本。三冊。縦23cm×横17cm。表紙は砥粉色。四つ目袋綴。外題は「伊達忠君実録 壹式」のように墨書されている。第一冊・第二冊の奥書に「天保十四卯／花見月出来／むらさわ」とある。これによれば天保十四（1843）年にむらさわ（詳細不明）という者の作となる。類似した史料名に『伊達忠臣録』があるが、本史料との関係は不明である。

内容は、寛文一一（1671）年の伊達騒動を記したものである。同名史料も少なくないが、同じ内容のものはないようである。

(請求記号W210.5/74/ 1～3)

24 堂上歴代正統図（どうしょうれきだいせいとうず）（江戸時代）

写本。一冊。縦26.5cm×横18.6cm。表紙は砥粉色。四つ目袋綴。外題は「堂上歴代正統図」と墨書されている。蔵書印「公方□□□六□□」、奥書に「右御追加之一冊者、靈陽院殿被染御筆／之処、更以追加新話録訖、／享保十五年庚戌春拜写焉、紙員五十三丁、／弓箭惣管領正五位上室町左馬権頭源朝臣／義真（花押、朱印）」とある。署名の「弓箭」の部分にかけて「八幡宮神官」の朱印がある。

内容は大きく二つに大別される。まず一つは「堂上歴代正統図」として、撰関家以下の堂上公家歴代の諱を記し、その下に官位等の割注がある。その後「右此付録之一冊者、靈陽院殿准三宮入／道義昭公、於備後国鞆御所、徒然之御慰に被染置御筆之書也、今更従天正之季年到当今就添書新話録訖、／于時享保十二年戊申三月上旬、墨付八十五丁、／御紀錄所預／弓箭惣管領正五位上左馬権頭源朝臣室町義真（花押、朱印）」の署名があり、肩書き部分にかけて「八幡宮神官」の朱印がある。

続いてもう一つは「大八洲国弓箭惣管領正統録」として神代、清和源氏、足利氏の歴代が記され、その下に割書で略歴が記されている。そして末尾には義真の名がある。次に光孝～桜町の歴代天皇が記され、その下に略歴の割書があり、前述の奥書がある。

奥書等によれば、本史料は室町幕府第一五代将軍足利義昭が備後国鞆滞在中に無聊を慰めて記したものである。それをもとに子孫である義真が享保一二（1727）年と同一五年に記している。義真

は足利氏を称そうとしているが曾爾北畠氏の子孫与治兵衛である（『奈良県宇陀郡史料』）。本史料にはおびただしい朱筆の加筆や○印等のチェック跡がある。

（請求記号W288/373）

25 難波戦記（なんばせんき／なにわせんき）（江戸時代）

写本。五冊。縦26.2cm×横19.4cm。表紙は藍色。四つ目袋綴。外題は「難波戦記 一之七」等と墨書されている。各冊の末尾に「五冊之内 川野氏」の墨書と「吉田／佐々木／曲尺手」の黒印がある。ただし第二～四冊の黒印には上から紙が貼られている。また第一冊には前記の前に「三河国吉田城下／ 尺傘町／佐々木屋京右衛門」の墨書が抹消線で消されている。前記の黒印からすれば、川野氏と佐々木屋は同一かも知れない。長友千代治『近世貸本屋の研究』（東京堂出版 1982年）所収の貸本屋蔵書一覧には見あたらないが、佐々木京右衛門は貸本屋であろう。曲尺手町は吉田城下の大手町付近である。

第一冊の冒頭には「難波戦記大全 卷之一」とあるが、その内容は樋口好運『諸家高名記』巻六とはほぼ一致する。第一冊の奥書にも、「諸家高名記 卷之七終」とあるように、以下、第二冊（巻八～巻九）、第三冊（巻一〇～巻一一）、第四冊（巻一二～巻一三）、第五冊（巻一四～巻一五はいずれも『諸家高名記』の内容である。

「難波戦記」の作者は万年頼方・二階堂行憲で、寛文年間以前の成立、すなわち一七世紀前半の成立とされている。これに対して『諸家高名記』は元禄一〇（1697）年の序で正徳四（1714）年刊行である。作者樋口と万年・二階堂の関係は不明である。「難波戦記」には異本が多く、また同名異書も多いが、本史料が『諸家高名記』との深い関係を示している。後考を待ちたい。

（請求記号W210.5/76/ 1～5）

26 播州赤穂忠臣記（ばんしゅうあこうちゅうしんき）（江戸時代）

写本。一冊。縦24.3cm×横16.7cm。表紙は藍色。四つ目袋綴。外題は「播州赤穂忠臣記 全」と墨書されている。表紙見返しの黒印は、「三州／渡辺／広石」で前掲長友著書には見当たらないが、貸本屋の印であろう。奥書には「天明四年辰年／正月吉日三州宝飯郡／シモチキリムラ／森田四郎兵衛」とあり、下千両村の森田と広石村の貸本屋渡辺の関係は不明である。作者・成立時期ともに不明である。同名史料はなく、類似した史料名に「赤穂忠臣記」があるが、本史料との関係は不明である。

内容は、著名な忠臣蔵・赤穂事件がテーマである。本史料は元禄一四（1701）年三月の朝廷からの勅使・院使派遣から始まる。この饗応役を命じられた播磨国赤穂藩主浅野内匠頭長矩が、指南役である高家筆頭吉良上野介義央を江戸城松の廊下にて斬り付けた。この時吉良は小用に立つ所だったとするのは本史料独自の内容である。浅野は切腹、赤穂藩は改易となり、牢人となった旧赤穂藩士のうち大石内蔵助良雄ら四十七士が主君の仇を討つ物語である。

（請求記号W210.5/ 75）

27 本願寺大秘録 石山軍鑑（ほんがんじだいひろくいしやまぐんかん）（明治時代）

写本。二五冊。前篇は縦23.6cm×横15.8cm、後篇は縦23.9×横16.8cm。表紙は藍色。四つ目袋綴。外題は表紙中央に「石山軍鑑前篇 四ノ六」等と墨書されている。後篇の外題は手擦れによる損傷が著しく判読不能だが、おそらく前篇と同様であろう。なお前篇第一冊の表紙には「明治十五年十一月改正／石山軍鑑 廿二冊」の貼紙があり、外題の下半分が隠れている。前篇第一察の表紙見返しに「三州／渡辺／広石」の黒印があり、前項目で述べた通り、貸本屋の印であろう。おもに最終頁に「渡辺兼印」の朱印があるが、これが貸本屋の姓名であろう。

作者は立耳軒、明和八（1771）年自序。前篇第一冊の貼紙によれば、本史料は明治一五（1882）年頃の写とも考えられる。写本としてかなり流布したらしく、各所に所蔵されているが、完本として揃っているのは数少なく、その点でも貴重である。

内容はインドでの仏教の始まりからあるが、中心は元亀元（1570）年開戦の織田信長と本願寺の合戦（いわゆる石山合戦）であり、敗れた本願寺が京都に再興されるまでを記す。

（請求記号 前篇W210.4/52/ 1 / 1-12、後篇W210.4/52/ 2 / 2-11）

《教育》

28 英和書状かがみ（えいわしょじょうかがみ）（明治時代）

刊本。一冊。縦18.6cm×横12.7cm。表紙は黄蘗色無地。四つ目袋綴。外題は刷り題箋「英和／対訳 書状かがみ 全」。小西松三編、明治六年（1873）八月刊。序文は征木齊美織で、明治六年五月の日付を付す。書肆は大阪の浅井吉兵衛。浅井吉兵衛は河内屋吉兵衛の名で江戸寛政期より知られる。明治期には他にも英語関連ほかの教育書の出版を見ることができる。

本書は、手紙の文例を英語と日本語で対応させた独学書とも言える書物である。手紙の文例は様々だが、たとえば「I accept with pieasure yours invitation to dinner on Saturday next at 5 o'clock. (後略)」と英文を提示し、続いて「華墨被見仕候 然ば来る土曜日夕^(ママ)五^{マネキ}字より私共御招に預り何より^{クワンラクク}歡樂不過之 (後略)」の和文が示される。英語の表現や語順に不自然な点が認められるものの、個々の単語の上部に直訳を記した点、下部には漢数字で日本語の語順と対応させている点など、工夫が見られる。

国会図書館蔵本（『英和書状かかみ』）は数ページの欠損があるが、共立女子大学図書館蔵本には欠損がなく、良本というべき資料である。

（請求記号W816／20）

29 かねもうかるの伝授（かねもうかるのでんじゅ）（江戸時代）

刊本。二冊。縦22.7cm×横16cm。浅黄色表紙。四つ目袋綴。外題は刷り題箋（第一冊「かねもうかるの傳受 上」、第二冊「かねもうかるの傳受 下」）。末尾に広告が三丁有り、本書がどのような読者層を相手としていたか想像できて興味深い。

本書は、「子孫長久繁栄」「すぐにカネモウカルの効能にて、開運出世」をもたらすための教訓書である。著者は脇坂義堂。脇坂義堂は江戸時代後期の心学者（生年不明～没年文化一五（1818）年）。本書以外に「銀のなる木の伝授」「長命になるの伝授」「福相になるの伝授」「和合長久の伝授」「開運出世伝授」など著作も多い。

本書に刊記はないが、同版と思われる影印を『石門心学書集成』小泉吉永編（クレス出版）で確認できる。掲載影印は「文政七年甲申春求版 皇都 藤井文政堂 三条通麩屋町角 書林 山城屋 佐兵衛」とある（ただしこの影印本は末尾広告はない）。

（請求記号 W157/17/ 1・2）

30 説教心のかなめ（せっきょうこころのかなめ）（明治時代）

刊本。一冊。縦22.3cm×横15.8cm。表紙は浅縹色。四つ目袋綴。外題は刷り題箋。見返しに「童蒙教諭 説教心のかなめ」の題箋、「平澤先生著、阪府下 文明堂 墨香居 梓」とあり。二～三頁目はカラー画。奥書に「明治七年二月御免許 同三月發兌 著述者 大阪平澤傳五郎 阪府下書肆 安土町四丁目 書林會社 南久太郎町 田中九兵衛 備後町三休橋通 廣瀬藤助 堂島北町 田原新助 心齋橋通安土町 北尾禹三郎」とある。

序によれば、平澤傳五郎は、江戸時代の思想家石門心学の始祖とされる石田梅巖の学流の人。本書はその子女向けの手引書で、語りの文体で書かれる。家庭をうまく収めるための心得としての孝の精神や、子育てのしかた、信心のありよう、儉約のこと、学ぶことの大切さについてなどが神話や和歌とともに説かれている。後半に進むにしたがって朱入れが増える。

（請求記号W157/ 32）

《芸術》

31 雅楽譜（大正時代）

- ① 『箏築譜』 一卷一冊.
- ② 『箏築雅楽譜（乾）』・『箏築雅楽譜（坤）』 二卷二冊
- ③ 『龍笛譜』 一卷一冊
- ④ 『龍笛雅楽譜（乾）』・『龍笛雅楽譜（坤）』 二卷二冊
- ⑤ 『笙雅楽譜』 一卷一冊

写本。箏築譜三冊（①②）、龍笛譜三冊（③④）、笙譜一冊（⑤）からなる一揃いの写本。①縦15.4cm×21.8cm、②④乾坤ともに縦17cm×横24cm、③縦13cm×横20cm、⑤縦12.4cm×横17.6cm。①③は本文共紙。②④⑤は青鈍色布目型表紙。①③は紙縹袋綴。②④⑤は四つ目袋綴。①③は題箋なし。それぞれ①「箏築譜」、③「龍笛譜」と手書きで記載。②④⑤は書き題箋（②「箏築雅楽譜 乾」「箏築雅楽譜 坤」、④「龍笛雅楽譜 乾」「龍笛雅楽譜 坤」、⑤「笙雅楽譜」）。②④⑤は内題あり。②「箏／築 雅楽譜」（乾坤共）、④「龍／笛 雅楽譜」（乾坤共）、⑤「笙雅楽譜」。内題横には署

名があり、②乾と⑤に原碧海、②坤に源孝、④乾坤に杉原碧海。②④⑤には以下の刊記あり。②「大正十五丙寅歳卯月上院清写／三河田原旧大手門内宮／杉原孝」、②坤「大正十五丙寅歳陸月下院写／田原町旧巴江城外／杉原碧海」、④乾「大正丙寅歳弥生中旬写／旧巴江城下／源宗道」、④坤「大正十五丙寅歳卯月上院写／田原旧巴城御総門内／杉原孝」、⑤「三河田原之住／閑覚庵主」。内題横と刊記の書名にはばらつきがあるが、筆跡や筆者の住所、落款印などから同一人物とわかる。②④⑤に跋文「○○楽譜 右は斯道之執心ニ依り相伝候也 長傳庵前住 白井太住」(○○には各譜面の楽器名が入る)。筆写者や教授者については未詳。

本文はいずれも雅楽の譜面で、主たる底本は、その内容や挿絵などから東儀文礼編『雅楽集』全三巻(1894)と考えられる。『雅楽集』の編者、東儀文礼(1852～1917)は楽家に生まれ、筆筆の演奏者として活躍した。『雅楽集』は、昭和九年にも復刻されて比較的広く流布した。ただ、当該資料は、『雅楽集』をそのまま写すのではなく、筆写者が関心のある曲を選んで抜粋して写したものである。また譜面の記載は必ずしも「写した」ものばかりではなく、記譜の仕方に『雅楽集』や現行とは異なる特徴が見られるものもあり、『明治選定譜』(太政官雅楽局が各楽家によって別々に伝承されていた曲目や譜面を、1876年と1888年の二度にわたって統一、制定したもの。以後の雅楽の規範となった)以前の伝承の名残を留めている可能性もある。なお、①と③は、収録曲にそれぞれ②坤④坤と重複が見られる。②④⑤の五冊がきれいな表紙を備え、署名や挿絵などが添えられて丁寧に筆写されているのに対し、①③は簡易な表紙で紙質も薄く譜面のみを記す。

(請求記号 W768/56・W768/57/ 1～2・W768/58・W768/59/ 1～2・W768/60)

32 画図醉芙蓉(がずすいふう) (江戸時代)

刊本。一冊。縦24.6cm×横16.2cm。表紙はこげ茶、布目草花模様。四つ目綴。表紙左上に白紙の貼り題箋。奥書に「文化六巳巳季夏刊 江戸書林 青黎閣須原屋伊八」とある。画師・鈴木芙蓉は江戸時代中後期の人物。信濃出身。江戸に出て、渡辺湊水に画を学び、寛政八年から阿波徳島藩蜂須賀家に仕えた(国書総目録に一二有り)。保存状態は良好。

本書は上中下巻三冊本を一冊に綴じ直したもので、表紙は本表紙ではないと見える。目録があるのは上冊のみ(「上冊目録／観瀾 遊兒 張師雄 山水 墨竹 山水 武侯 後赤壁 鴛鴦観瀑 移梅 鬪異基 大客 明皇 布袋山水 右軍 黄石 孫叔敖 墨梅 雙鶴 墨菊 闕茗 前赤壁 漂母」)。中巻以降は目録がなく、前頁に続いて画が始まる。国立国会図書館本、東京藝大本のデジタル画像と比較すると、下巻にあたる部分に綴じ違いとおぼしき箇所がある。国研本、藝大本の下冊目録には「品茶 匡廬山 馬 富嶽 三峽 山水 壽星 蝦 山水 墨梅 倦繡 石門山 山水 孟光 松島 遊兒 乳犬 小景 呂僊 錢神 小景 西施 隻丈 飛燕 班姬 太真 小景 蝦蟇 仙 射獵」とあるが、本書下巻には「墨梅」「倦繡」にあたる見開き一頁が無い。また、本書は「西施」「班姬」の順に載り、そのあとに「楊貴妃」が見開き一頁、その次に「小景」「鶯ヒ」と続き、「趙飛燕」と「蝦蟇仙人」が見開き1頁に載る。いっぽう、国研本では「楊貴妃」の次に「鶯ヒ」が載り、次の見開きの右頁には「趙飛燕」が、左頁には本書と藝大本の「楊貴妃」の左頁にあたる画が

載り、「小景」「蝦蟇仙人」の画が続く。いずれも目録とのずれが認められる。また、国研本と藝大本と本書とは綴じ順が近い。

(請求記号W721/64)

33 款識百例 (かんしきひゃくれい) (江戸時代)

刊本。一冊。縦8.2cm×横18cm。表紙は縹色。三つ目袋綴。外題は刷り題箋。

本書は安政元年刊、著者は畑時習(当時四一歳)。本名、畑鉄鶏(文化一一〔1814〕～文久二〔1862〕年)。時習は字、通称・道意。大阪で活躍した戯作者・畑銀鶏の子で、江戸時代後期の医師、画家、狂歌師として知られる。江戸で医業を営んだのち、故郷上野で七日市藩医となった(父・銀鶏、祖父・金鶏も同藩医)。絵は沈南蘋に師事。都〇居士、大沼枕山、逸齋観、蘆屋散人、長山樗園による四つの序があり、例言に「宋元明清諸名家ノ款識ヲ諸書ニツイテ収載シ例ヲ分ツ事一百題シテ百例ト云フ以テ覽ニ便ナラシム」「書画ニ志ス初学ノ輩ニ教諭テ款識ヲ指示ス大家ノ勞ヲ援ケント思フノミ」とある。「款識」は書画などにおける作者の書名や押印のことを指す。本書には、書画の成立・作画事情や意図を示す百語が、その用例とともに示されている。

また、書き手は不明だが、十三丁表に半紙付箋で「廿五 一品ヲ數日ニテ書シ例」「廿六 書竟ト書例」についての注釈がある。さらに、後付けと見られ本文の情報ではないが、表紙見返しには「嘉永甲寅崑山齋来以二匁錢収貯〇/元備」、裏表紙裏には「觀此序跋是具当世人物且喜幸不厠名於玄間/元備識」とある。元備は、深川(上総)出身、文化七〔1810〕-安政三〔1856〕年)。嘉永甲寅は孝明天皇時代の1854年、嘉永七年/安政元年にあたる。なお崑山齋は未詳。これらの記述によれば、本書は刊行年時よりすでに世間に流布したと考えてよさそうである。

(請求記号W726/11)

34 集古名公画式 (しゅうめいこうがしき) (江戸時代)

刊本。五卷五冊。縦26cm×横16.8cm。表紙は白鼠色無地。四つ目袋綴。外題は刷り題箋(「集古名公画式 人物 一」、「集古名公画式 人物器玩 二」、「集古名公画式 屋舎楼台 三」、「集古名公画式 屋舎楼台 四」、「集古名公画式 亭樹橋梁 舟楫 五」)。序文と跋文に「庚申」とあり、万延元年(1860)刊とされる。刊記に「和漢書画譜翻刻書物所 京都書肆 御幸町御池南 菱屋孫兵衛」。

著者である高橋草坪(1802/1803～1833)は田能村竹田の高弟で活躍が期待されながら、夭逝した幕末の南画家である。草坪は、師である竹田の教えのとおり、中国明清画やその粉本を熱心に学んだ。それは彼の『撫古画式』から窺い知ることができる。『撫古画式』は自筆稿本である(『大等級記念文庫 善本叢刊』15巻所収)。当該の『集古名公画式』は草坪の死後に、邨山荷汀(半牧)(1828～1868)と村田香谷(1831～1912)が草坪の描いたものに校訂を加えて出版したものとされ、『撫古画式』との関連が推測できる。

なお、板元の菱屋孫兵衛(藤井孫兵衛)は五車楼という書肆の店主名で、代々孫兵衛を継承した。

刊記に、「藤井孫兵衛」、第一巻表紙見返しには「草坪先生原本 荷汀・香谷・店主増転 集古名公画式 五車楼蔵」と記される版もある（筑波大学蔵本ほか）。

（請求記号W722／34／1～5）

《諸芸》

35 絵本大人遊（えほんおとなあそび）（江戸時代）

刊本。上中下三冊。縦22.1cm×横16cm。表紙は鳥の子色雷紋繫ぎ地に桐唐草。四つ目袋綴。外題は刷り題箋（第一冊「繪本大人遊 上」、第二冊「絵本おとな遊び 中」、第三冊は剥落）。内題は「絵本大人遊」。蔵書印「倉澤氏」、「蔦屋 長岡柳原」、「ヤマ門（以下判読不能、円形、陽刻）」。跋文「寛政子のとし春 南無阿弥墮物」。寛政四（1792）年刊。

『絵本大人遊』は兵三子作、畑水山人画の遊戯書。計二四種の室内遊びを記す。上・中は図を記し、下でその解説文を記す構成となっている。現在も行われている遊びも見え、例えば「睜眼（にらみごくら）」は、今でいう「にらめっこ」である。

本書に付された別紙には、挿絵が従来写楽によるものとされていたことが記されているが、現在ではその論は否定されているようである。

（請求記号W384／37／1～3）

36 蹴鞠大意記（けまりたいいき）（江戸時代中期）

写本。一冊。縦22.8cm×横16.4cm。表紙は本文共紙。結び綴（糸・紙縫欠損）。外題は打ち付け書き。跋文によれば「飛鳥井家秘本三冊去方伝来」を伊藤甚右衛門幸氏が写したとある。その後、書写が重ねられ、最終的には寛保元年（1741）に楠田長高が写した。伊藤甚右衛門幸氏は、江戸前期の故実礼法家である水島卜也の高弟であり、礼法書の奥書にその名が見えることが多い。

本書は蹴鞠の由来、心得、作法などのほか、「鞠十徳の次第」や「蹴鞠三十一道和歌」、蹴鞠をす際の庭の作り方などが記される。蹴鞠といっても、公家のもではなく地下の蹴鞠である。「鞠十徳」とは、「神徳在、形能成、足利、目早、無病、愛敬在、高下交、独慰、一芸足、成仏」といった鞠の効能のことである。こうした記述は、近世の地下向けの鞠書によく見られるという。（渡邊融「近世蹴鞠道飛鳥井家の一年」（『放送大学研究年報』17号、2000年3月）

また各項目の記載は、蹴鞠の飛鳥井流の祖である飛鳥井雅経の『蹴鞠之条々大概』に重なるほか、「蹴鞠三十一道和歌」は、『鞠道三十首之和歌』（『蹴鞠百五十箇条』）に付く。『続群書類従』第十九輯中、蹴鞠部、卷五三八）とほぼ重複していることから、様々な蹴鞠の伝書を集成的にまとめたものと考えられる。

（請求記号W783／29）

37 香道（こうどう）（江戸時代）

写本。一冊。縦22.5cm×横15.9cm。表紙は香色。四つ目袋綴。外題は書き題箋。奥書に、「右此一

卷者當家要用所也不免他見者也／貞享元曆九月／小笠原遠江守源朝臣長真下士 竹井少助定興 本條藤左衛門種聰 二神長右衛 種興 花押／川村／寛保二戌十二月日 瀬山傳太史重甫 花押／延享二乙□九月日 楠田殿右衛門長高 花押」とある。

本書の最初の書写者「小笠原遠江源朝臣長真」は、『小笠原流礼法伝書』で名高い小笠原氏であり、信濃小笠原氏の貞慶より天正九年に「幕一流之書」を伝授された人物。なお書写者のひとり瀬山重甫は「産所纂目濫奥傳」（請求記号W210／422）の、楠田長高は「書札礼伝追考」乾（W210／399）・坤（W210／399／2）、『十炷香記録之次第』（W792／3）の書写者。

本書は香盆の種類、それらの素材や形や、香盆に香道具をどのように置くかについて説くことから始まり、香炉、香のたきかた等が箇条書きで記される。のち、十炷香について、また香炉の灰の模様の図が載り、五十種の香の原材料の名と、薫物の調合について示されて終わる。江戸時代中期以降の武家における香道の伝わりかたの一端が知られる。

（請求記号W792／2）

38 料理献立集（りょうりこんだてしゅう）（江戸時代）

刊本。一冊。縦22cm×横15.7cm。表紙は損傷が著しいが、藍色無地。四つ目袋綴。外題は刷り題箋（「料理献立集 上」。内題は「料理献立集」。蔵書印「横野氏蔵書」。貞享三年、菊屋七郎兵衛（京都）刊。

江戸前期に成立した料理の献立集で、寛政年間に刊行された。以降、何度かにわたって度々刷られたようである。上巻は汁物、田舎雑汁、精進汁の項目に始まり、婚礼の際の祝言引渡の解説がつく。下巻は刺身や和え物の項目がたてられ、それぞれ一月から十二月までの各月に適した素材が列挙され、項目によっては蒲焼きや含め煮などの調理法も記される。また、「焼き物に適した魚」の項目や、「かまぼこに適した素材」などの項目もある。焼き物の魚の項目を見てみると、それぞれに適した調味も記されており、当時から鰻には山椒、鮎には蓼酢を合わせていたことが分かる。元々上下巻であったものを一冊に改装したように見え、表紙や紙面隅の損傷状況から、頻繁に参照されていたことが想像される。

（請求記号W383.8／30）

《武学・武術》

39 乗馬口伝（じょうばくでん）（江戸時代）

写本。乾坤二冊。縦22.3cm×横15.8cm。表紙は藍色。五つ目袋綴。乾の表紙には絵が描かれてあったとおぼしいが、剥離が激しい。外題は書き題箋。。

本書は、大坪流口伝書（室町時代の馬術書）の叢書のひとつか。乾の奥書には「此一冊齋藤備前守芳蓮佐々木承禎公於御吟味之上進上の書物也再三可有拜見者也／延寶九年 鳥飼覚兵衛／正月十一日 正俊 花押／曾我平太夫殿」とある。

序に、村上氏の沙弥慶秀の号・大坪庵主は馬を操る達人で、この口伝は慶秀（大坪庵主）とその

嫡子・加賀守永幸和父子のそれであり、故にこの口伝の名を秀幸論とも言うと言われ、「應仁元暦三月十八日／齋藤兵庫頭國忠誌焉」の署名がある。本文は「一 馬を乗には第一力草の尺を知るべし」から始まり、そのほか乗馬の際に留意すべきこと、言うことをきかない馬の扱い方など、馬術についての心得が示されている。

奥書に示された齋藤芳蓮は戦国から織豊時代の馬術家、佐々木承禎は戦国時代の人物。鳥飼覚兵衛は未詳、江戸後期土佐藩の人か。曾我平太夫は不明。坤の識語には「此書物者於江別観音寺佐々木承禎公、齋藤伊豆守芳蓮是進」以降、羽柴左衛門佐、中村孫兵衛、大西木工助吉次、上田吉之丞重秀、守能勘解由助長明、能勢勝左衛門頼春、鳥飼覚兵衛という伝授の系譜が記され、「延寶九年正月吉日 曾我平太夫殿」でしめくくられている。

(請求記号W789／10／1～2)

Ⅲ 「日本文学講読A」における古典籍利用の試み

「日本文学講読A」は、文芸学部専門分野Ⅱに位置し、日本文学専修および教職（国語科）の必修科目である。以下、科目概要と授業内容をあげる。

科目概要：「古典籍（和本）に関する体系的な知識や古典籍を扱う時の注意点を学び、変体仮名の読解能力と、翻刻、校訂などの基礎能力を身につける」

授業内容：「物語の「祖（おや）」と呼ばれた『竹取物語』や、業平らしき男を主人公とする『伊勢物語』などを、江戸時代以前に作成された写本や版本の影印（写真版）で講読してゆく。まずは、『字典かな』（笠間書院）を用いながら、変体仮名（くずし字）を読む訓練が中心となるが、同時に「文字」の歴史や、平安時代の文学史、さらに古典籍を扱う時の基礎的事項も学び、和本リテラシーを身につける。適宜、共立女子大学図書館蔵の貴重書を実見することを通して、現在の「本」と昔の「本」の違いや変遷を看取してゆく。」

毎年60～70名前後の受講者がおり、3クラス開講しているが、3人の担当者（岡田ひろみ、飯田さやか、咲本英恵）が綿密な打ち合わせを行いながら、授業内容や教材を決定している。最終試験は、3クラス合同で、古典籍に関する書誌知識および、くずし字の翻字のテストを行う。

本授業は、積極的に和装本や絵巻などの展示鑑賞にでかけるよう推奨しており、2022年度（前期開講）は、「見努世友（みぬよのとも）と古筆の美」（出光美術館）、「鑑定文化と古筆家の人々」（慶應義塾ミュージアム・コモンズ）のいずれかを訪れるよう指示したところ、多くの学生が両方鑑賞にでかけていた。本共同研究が主催した学内展示（「鎌倉殿の時代はどう読まれたか」（2022年11月15日～12月17日）、「書物の中の音楽」12月1日～12月17日）については、kyonet掲示を通して、前期「日本文学講読A」を履修していた受講者に案内を出した。2023年度（後期開講）は、学外展示については課題とはしなかったが、「古典籍のインターフェース」筑波大学附属図書館企画展、「や

まと絵―受け継がれる王朝の美」東京国立博物館などが行われていることを案内し、展示見学のかわりに、授業内で本学図書館所蔵の古典籍を実見する体験授業としておこなった。これまで学内展示で本学の古典籍を紹介する機会は何度も設けているが、古典籍に触れ、本の扱い方を実体験として学ぶ場を設けるのは、本授業においては初めてのことである。

実見する古典籍は、『目録―第二―』に収録したもので、学生の興味・関心をひきそうなものを選択した。「伊勢物語絵入 (W913.3/297/1~3)」「源氏物語小鏡 (W913.3/300/1~3)」「江戸大節用海内蔵 (W031/53/1~2)」「名所便覧 (W911.1/75/1~3)」「かねもうかるの伝授 (W157/17/1~2)」「絵本大人遊 (W384/37/1~3)」「料理献立集 (W383.8/30)」の7作品である。

授業利用に際しては、図書館に貴重書利用申請を出し、20名を超えるクラスは二号館教室で、20名以内のクラスは二号館図書館内で学生たちが実見する場を用意していただいた。また、時期については、教員3名で相談のもと、学生たちが和本について学び、くずし字能力が身についてきた（一回目小テスト終了後の）11月初旬とすることにした。実見する前に、目録を読み、当日は持参するよう伝えた。

結論から先に書くと、授業として図書館で和装本を実見する機会を設けたのは大成功であった。もちろん、貴重書として所蔵されている本なので、細心の注意が必要ではあるが、「本に触る前には手を洗うこと」「マスクをすること」「筆記用具は鉛筆でペンは使わない」「髪が長い場合は、本に触れないようゴムなどでまとめる」「装身具（指輪など）ははずす」「本を見るときは机においたまま。手にとるときもなるべく机に近いところで」「（水分は大敵なので）飲み物は近づけない」などといった注意点を理由とともに、丁寧に説明したことで、学生たちは良い緊張感をもって本と向き合ってくれた。



実見風景

以下、学生の感想を一部紹介する。

- ・実際に古典籍に触れてみて、絵も文字もとても細かく書かれていると思いました。実際に触ることで袋綴の構造や紙の質などもよくわかりました。
- ・本なのでもちろんそれだけを読んでも面白いのですが、「これ（この内容のもの）が本になったのか」と思うと、「流行ったのかな」「どこから知ったのかな」と気になるので、歴史や文化史の年表がほしいと思いました。同じ江戸時代といっても長いですし、本の背景が知りたくなりました。
- ・紙の余白のつかい方が面白いとおもいました。字体にもさまざまなものがあるのがわかりました。
- ・少し湿っているような、しなっとしている紙や、パリッとしている紙など同じ紙といっても、質感が全然違うのがわかって面白かった。（共立女子大学の）図書館にたくさんの和書があったことを実際に見て驚いたし、申請すれば取り寄せることができることを今日はじめて知った。
- ・表紙の様子がきれいで印象的でした。何か押しつけてつくのでしょうか。
- ・薄くて柔らかく、触れるのに緊張した。綺麗な状態で残っているものと、虫食いや糸のほつれが多いものと本の状態は様々であった。分厚い本のほうが比較的綺麗な印象があったが、関係があるのかどうか疑問に思った。
- ・「かねもうかるの伝授」では、薬の広告が後ろに掲載されていたが、広告は今と同じような収益を得ていたのか、出版社の身内や近しい企業の広告を打っていたのか気になった。客層と本と広告に関連性があったかどうかとも知りたいと思った。
- ・和歌の書き方が、間に大きなスペースがあって、他と違う書き方であることに気がついた。

特に、「紙」に触れたことへの感動を記している学生が多かった。本の装丁や、作品の内容と装丁の関係、本が出版された背景・文化への興味、初見の本なのに、（少し）くずし字を読むことができているという気づきを書いている学生もいた。7種類の作品のうち印象に残ったものを2つあげてもらくと、特に学生の関心を集めたのは、「江戸大節用海内蔵」「伊勢物語絵入」「絵本大人遊」「料理献立集」だった^(注4)が、その他4種類についても、それぞれ複数の学生が名前をあげており、誰の目にもとまらなかった（誰にも関心をもたれなかった）作品はなかったことも興味深かった。

授業では、いまだ紹介されていない、翻刻されていない本が数多く残っていること、くずし字を読む力をつけ、和装本の扱い方を知れば、そういった新たな本と出会う機会を得ることができることについても話しをした。くずし字を教室内で学んでいたときより、いっそう古典籍への興味・関心が増したように思う。「目録第二」と実物を比較しながら装丁等を観察していた。

「貴重書」として所蔵されている古典籍を学生たちにとっても身近なものとしてひらくには、図書館との協力関係が必須である。今回も快く迎え入れてくださり、快適な閲覧場所を提供して下さった。

今後、この授業で行いたいことは数多くあるが、たとえば「料理献立集」などは、家政学部の先生方からご教示いただけることも多いように思う。文学学部の教員間での情報交換はもとより、学

部をこえたかたちで本学図古籍について考えてゆきたい。そして、学生それぞれが個の意志で、手にとり、調査するような契機を作れるよう教員としても模索してゆきたいと考える。

(注1) ここ数年特に、様々な学会で特集がくまれ、研究論文も多い。ここでは紙幅の都合上、論文集および、学会シンポジウムを一つずつ紹介しておく。荒木浩編『古典の未来学』(文学通信 2020年10月)は900頁ほどの大著で、古典研究のこれから、社会還元のあり方など、様々な点参考になる。特に「古典籍」や教育と関わる論考をあげると、中前正志「女子大で古典を展示するということ—実践報告とそれに基づく若干の考察」、上野友愛「美術で楽しむ古典文学—『徒然草』展の事例報告」、竹村信治「『投企』のカタチ—教室の「古典」、未来に活かす古典—「古典は本当に必要なのか」論争の総括と展望」、飯倉洋一「古典を必修にするために」、渡辺麻里子「くずし字を知ること—日本古典文学の基礎学を考える」、中野貴文「古典との出会い方」など、すぐに実践・応用したくなる提案や報告も多い。「『日本文学協会第78回(2023年度)大会テーマは「現代の中の古典文学研究」と題され、シンポジウムが行われた。「研究をひらくということ」(鈴木健一)、「文豪に育成される読者—「文豪とアルケミスト」から考える文学知の社会との環流—」(大木志門)、「(播種)としての古典文学教育」(坂倉貴子)、「(社会のために)から(社会のなかで)—パブリック・ヒストリーの現場から考える」(北條勝貴)」といったタイトルで各諸氏による報告・討論が行われた。現代のなかの古典文学を考え、現代社会にどうひらいてゆくのか、古典文学研究に携わるものが考えるべき大きなテーマである。

(注2) 本学図書館の和装本に関わる関連する研究として、岡田ひろみ、咲本英恵、内田保廣、菅野扶美「本学所蔵貴重和装本(和歌・物語)の書誌調査報告：竹取物語絵巻・伊勢物語・湖月抄・今物語・馬名合・勅撰集・仮名文字遣・自讃歌：付：白戸満喜子「共立女子大学図書館所蔵古典籍の料紙観察に関する報告書」、「共立女子大学・短期大学図書館所蔵和装本目録作成のために」(『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』第27号 2021年2月)があり、今回の研究もその延長線上にある。「竹取物語絵巻」は、現在も日本文学講読Aの授業で影印テキストとして使用しており、関連する研究として、山本聡美「共立女子大学図書館所蔵絵巻の基礎的研究：「竹取物語絵巻」「利仁草子」「異疾之巻物(病草紙模本)」「鳥羽絵巻物(鳥獸戯画模本)」(『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』第24号 2018年2月)、岡田ひろみ「物語を変体仮名で読むために」・咲本英恵「視覚障害者向け変体仮名学習テキストの作成について」・山本聡美「共立女子大学図書館所蔵「竹取物語絵巻」を用いた変体仮名教材制作」・五十嵐有紀「共立女子大学図書館所蔵「竹取物語絵巻」トレース図制作に関する報告」(『共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要』22号 2016年2月)がある。

(注3) 目録解説については、岡田ひろみ(1、3、8、9、14、22、29)、咲本英恵(2、10、15、30、32、33、37、39)、土田牧子(4、16、17、18、28、31、34)、飯田さやか(5、6、7、12、13、35、36、38)、堀新(19、20、21、23、24、25、26、27)が行い、調査・編集などは近藤社を含め、全員で行った。

(注4) この4作品については、カラー口絵に掲載した。

【付記】 本稿執筆者名の掲出順は、研究代表者の岡田を最初にあげたが、その他五人は便宜的に五十音順としたものであり、研究内容の分担率等とは無関係である。

An Attempt to Use the Japanese-style Books of Kyoritsu Women's University Library Collection for Educational Purposes

Hiromi Okada Sayaka Iida Sou Kondo
Hanae Sakimoto Makiko Tsuchida Shin Hori

In recent years, there has been a lively debate among various academic societies on the state of classical literature education. As is well known, the social tendency to regard classical literature as unnecessary is growing stronger year by year. This situation should not be overlooked by those involved in classical literature education, nor by classical literature researchers. As a way to increase interest in classical literature and culture, we believe it is important to introduce Japanese-style books, mainly from the Edo period and earlier, and to let them known widely through education.

Despite the large collection of antique Japanese-style books our university owns, no research on them had been made public, except for a catalog compiled in 1996. Thanks to the grant for cooperative researches by the Center for Interdisciplinary Studies of Science and Culture, we have compiled the second catalog. Of the books not included in the initial catalog, 40 items were selected as particularly rare, in good condition, or widely known, and are described not only in terms of their bibliography, but also in terms of their contents. This catalog was designed to be used not only for research but also for education. It was distributed to students enrolled in Japanese Literature Reading A in 2023, where the students were provided with opportunities to actually contact with classical Japanese-style books and to increase their interest in them.



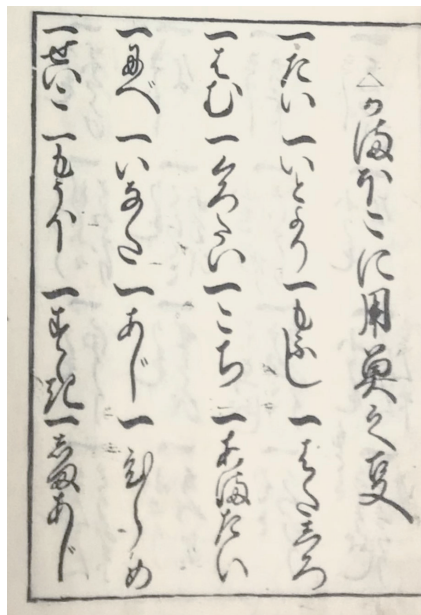
1 江戸大節用海内蔵



10 伊勢物語絵入



35 絵本大人遊



38 料理献立集